

## 成る存在としての人間、人類(3)

### ——サン＝テグジュペリの『人間の大地』について——

木 谷 吉 克

#### 7. 人間の意識の奇跡

ルネ・マリル・アルベレスは、サン＝テグジュペリを単に行動人としてのみならず、詩人、「宇宙の詩人」<sup>(1)</sup>としてとらえるべきであることを強調する。

「サン＝テグジュペリの思想は、ただ単に、ひとりの行動人の経験と要請にとどまるものではない。それはまた、ひとりの瞑想家の反省でもあるのだ。人間たちを結びつけようと熱意を燃やすのと同様、サン＝テグジュペリはまた、宇宙のなかに人間を位置づけなおし、その役割と使命とをより広汎なかたちで定義することを夢見る。彼にとって人類は、ジロドゥーにとってそうであったように、自然の荒々しく無関心な支配にゆだねられた、エゴイストで自閉的な企図としてあるのではなく、逆に、宇宙にその意味を与える奇跡ともいえるものの、自然の秩序自体のなかにおける成就としてあるのである。」<sup>(2)</sup>

『人間の大地』のなかでサン＝テグジュペリの展開する人間観は、たしかにアルベレスのいう「宇宙の詩人」たるサン＝テグジュペリのとらえた、ひとつの広大な世界のヴィジョンのなかに位置づけられ、組みこまれるだろう。この広大な世界のヴィジョンは、アルベレスも言うように、ベルグソンやテイヤー・ド・シャルダンの生命進化のヴィジョンにきわめて近い。とはいえ、それは単なる影響関係によって説明されるものではない<sup>(3)</sup>。サン＝テグジュペリのヴィジョンは、何よりも彼自身の飛行体験と、「宇宙の詩人」たる彼の瞑想と想像力と思索から生まれ出たものである。

前章で述べたように、サン＝テグジュペリは、ひとつの認識の道具である飛行機によって、地球がいかに不毛の地であるかを発見し、同時にその不毛の大

地の上に、生命がいかに脆弱に見えながら、懸命に花咲こうと努めているさまに驚嘆する。地球の不毛性の発見は、生命についての新たな発見、新たな見方をもたらした。サン＝テグジュペリ自身のことばを用いるなら、「宇宙的尺度で人間を判断」し、「人間の歴史をさかのぼって読む」ことを可能にしたのである。

前章では、この生命についての新たな発見、新たな見方とは何か、あるいは「宇宙的尺度で人間を判断」し、「人間の歴史をさかのぼって読む」とは何なのか、については深く追求しなかった。結論から先に述べるとすれば、「人間の歴史をさかのぼって読む」とは、この地球上で、これまで連綿と続けられてきた人間へといたる生命の全歴史を読むということであり、それがひいては「宇宙的尺度で人間を判断」することを可能にするのである。

アルベレスが言うように、飛行の高みから望見する大地の光景は、サン＝テグジュペリに「まだ生命の生まれていない空虚な遊星のイメージ」<sup>(4)</sup>を喚起する。このイメージはサン＝テグジュペリの作品の随所に見られるイメージであり、処女作の『南方郵便機』では、それは次のような鉱物質のイメージとなって現われる。

「彼はひとりぼっちだと思う。高度計の文字盤のうえに太陽がきらきら輝いている。まばゆくて、しかも凍ったような太陽。ラダーのペダルをひと踏みすると、風景全体が横にそれる。この光は鉱物質だ。大地も鉱物質の姿を現わす。生命あるものの柔らかさ、香り、脆弱さをつくりあげているものが消えうせる。」(OC I, p.41)

離陸し高度を上げるにつれて、飛行士の眼下に広がる世界は生命のもつ柔らかさ、流動性、暖かさを失ってゆく。世界は硬く凍った不動の世界に変貌する。逆に飛行機が次第に高度を下げ、地上に近づくとき、世界に再び生命が吹きこまれる。

「高空からは、大地はむき出しで死んだもののように見えていた。だが、機が下降すると、大地は衣装をつけはじめる。森はふたたび大地にキルティングをほどこし、谷や丘が大地のなかに大きなうねりを刻みこむ。大地は呼吸している。山のうえを飛ぶと、まるで寝ている巨人の胸のように、それがほとんど

彼のところまで盛りあがってくる。

いまや間近に、橋の上からながめる急流さながら、ものの流れが速度を増している。平坦だった世界の解氷である。」(OC I, p.45)

『夜間飛行』では、地上への降下は、人間たちの住む遊星への帰還である。

「エンジンの回転数を落としてサン・フリアンのように降下しながら、ファビアンは疲れをおぼえた。人間たちの生活に安らぎを与えているいっさいのもの、彼らの家、小さなカフェ、散歩道の並木が、彼のほうに大きくせりあがってきた。」(OC I, p.114)

飛行は、サン＝テグジュペリに、地球上でこれまで演じられてきた生命の歴史を逆にたどることを可能にしたのではないだろうか。飛行は、彼にとって、さながらひとつの時間旅行、生命の誕生以前の地球にまで一気にさかのぼり、再びそこから人間たちの住む現代の地球へと帰還するひとつの時間旅行でもあったのではないだろうか。この時間旅行によって、サン＝テグジュペリは生命の誕生とその歴史に思いをはせるにいたる。そして地球の鉱物質の基層の上にいかにして生命が誕生しえたのか、またいかにしてその生命が高度の意識を有する人間にまで進展しえたのか、という問いにとらえられる。だが、その答えはえられない。それはただ奇跡としか言いようがない。

したがって、生命、人間、人間の意識はサン＝テグジュペリには奇跡なのである。

「わたしの目には、アルゼンチンでの最初の夜間飛行の折、星々のように、草原のなかに散在する数すくない燈火がまたたいているだけの、暗い夜の模様が永遠に灼きついている。

そのひとつひとつは、闇の大洋のなかで、人間の意識の奇跡を告げ知らせていた。」(OC I, p.171)

『人間の大地』の「飛行機と地球」の章には、サハラ砂漠に点在する円錐形をした台地のひとつに着陸したときのエピソードが語られている。その台地の端は断崖になっていて、かつてだれもその地に足を踏み入れたことはなかったし、小さな貝殻の残骸からなるその地には一本の草すら生えたことはなかった。「おそらく、動物であれ人間であれ、まだだれも穢したことのない地域にはじめ

て足跡を残したという子どもっぽい遊び」を味わいながら、語り手はそこにしばしとどまる。そして「一個の黒い小石」を発見する。それは隕石でしかありえない。というのも、この台地は数十万年の昔から「ただ星たちだけに捧げられていた」のだし、いわば「星々のしたにひろげられたテーブルクロス」であったからである。「星々のしたにひろげられたテーブルクロスには、星々のかけらしき落ちてこないはずだ」と考えて、ほかにも隕石が見つかるにちがいないと、語り手は探しはじめる。そして一ヘクタールにほぼ一個の割合で、隕石を収集する。かくして語り手は、数十万年の昔よりこれまで、数々の隕石が天から雨のようにこの地に落ちてきた光景をまざまざと目に浮かべる。

「そうやってわたしは、驚くべき時間の圧縮のなかで、この星々の雨量計の高みから、緩慢な火の驟雨に立ち合ったのである。」(OC I, p.206)

この話は、一見子どもっぽい冒険心の発露を語るほほえましいエピソードにすぎないかのようにみえる。しかし、そこには、作者サン＝テグジュペリにとって、本質的ともいえる深い意味があり、それはすぐあとで次のように明かされる。

「とはいえ、最大の奇跡は、その場所に、つまり、地球のまるい背のうえ、その磁気をおびたテーブルクロスとそれらの星々のあいだに立つ人間の意識というものが存在し、その意識のなかで、鏡に映るようにその驟雨が映っているということだ。鉱物質の層のうえでは、夢想はひとつの奇跡だ。」(OC I, p.206)

この「鉱物質の層のうえでは、夢想はひとつの奇跡だ」ということばのもつ意義を、アルベレスほどみごとに解明した批評家はいない。

「《鉱物質の層》とは、進化の最低次の出発点（非有機的世界）である。《夢想》、すなわち、あらゆる存在のうちで最高次の、人間というこの存在の内的生命は、宇宙における生命進化の現在における到達点である。サン＝テグジュペリの想像力と思想とは、宇宙におけるこの生命進化にたいする瞑想のうえに基礎づけられている。」<sup>(5)</sup>

「鉱物質の層」と「夢想」とのあいだには埋めることのできない断絶があるようにみえる。両者は無限の深淵によって隔てられているかのようにみえる。だが、実際は、このかけ離れたふたつのものは、ひとつの連続性によって結び

つけられている。つまり、「鉱物質の層」と「夢」のあいだには、生命の誕生とその進化の途方もなく長い歴史があり、両者はその歴史の出発点と到達点に位置している。だが、このような連続性を信じるには、両者はあまりにもかけ離れている。しかもこの連続性がいかにして可能であったのかも謎である。だからこそ「奇跡」と呼ばざるをえないのである。

とはいえ、この「奇跡」はこの地球上でたしかに起ったのである。非有機的世界に生命が誕生し、それ以降何十億年にもわたって生命が進化してきたことは、疑いようのない事実である。この事実をサン＝テグジュペリがどのように解釈したのか、それを次章で明らかにしてゆきたい。

## 8. 意識の拡張

人間の意識は動物のように「今」「ここ」に縛られてはいない。例えば動物が砂漠の隕石を見たところで、ただの石ころとしか見ないだろう。ところが人間は、砂漠の隕石から、それが空から地上に降ってくる光景をまざまざと思い浮かべることができる。人間は現在の必要だけに縛られて生きているのではない。人間の意識は現在という時を越え、今いる場所を越えて、はるかな昔、はるかな空間へと飛び立つことができる。人間の意識のこの特性を、生命進化の事実にも照らし合わせるとき、何が導き出されるだろう。

不毛で鉱物質の地球に、あるとき生命は足がかりをえて出現し、物質の抵抗に会って時に逸脱し、分裂しながらも、それ以降、物質界に足場を固め、次第に地歩をひろげてゆき、ついには人間へといたった。サン＝テグジュペリは、この人間から、つまり生命進化の最先端に位置する人間から、生命進化の歴史を逆に顧みる。そして、そこにひとつの方向性を発見する。それは意識の解放であり、意識の自律性の増大であり、意識の拡張である。

ところで、このような生命進化のとらえ方は、サン＝テグジュペリだけのものではない。サン＝テグジュペリのとらえ方は、ベルグソンやティヤール・ド・シャルダンのとらえ方にひじょうに近い。

ベルグソンは、生命進化の根底には生命の根源的なはずみがあり、この生命のはずみはまた「創造の要求」でもあって、それが生命にますます複雑な形態をとらせ、不斷に生命を進化させてゆくと説く。ベルグソンのことばに従えば、それは「生命にますます複雑な形態をとらせながら、生命をしだいに高度な運命へとつれてゆくある内的な推進力」<sup>(6)</sup>である。この推進力は「内的な」もの、つまり心的なものであって、ベルグソンにとっては、生命は心的なものであり、したがって、生命の進化は「意識の進化」に近いものとなる。

「われわれの分析が精密であるならば、生命の根源にあるのは、意識あるいはむしろ超意識である。」<sup>(7)</sup>

ティヤール・ド・シャルダンもまた、ベルグソンと同様に、生命の心的性質、生命進化の精神的性格を認めている。生物の進化の過程をたどってみると、外的には生物の神経系の漸進的複雑化が、内的には意識のより高次の自発性への進行があると、ティヤール・ド・シャルダンは言う。

「全体において、またそれぞれの枝に沿ってたどられる生物の博物誌は、外的には、巨大な神経系の漸進的確立の過程を描き出すからには、内的には、地球大の規模をもった心的世界の形成に対応するのである。表面には神経線維と神経節、深層においては意識がある。わたしたちは外観の錯綜を秩序立てるために、単純な一般法則しか探求しなかった。が今や、この現象がたどってきた曲線を、過去において正しく跡づけ、またおそらく、未来においてもこの曲線がたどるであろう道筋を規定しうる基本的変数を（最終的には進化は心的性質をもつものだという最初の予測どおりに）つかんでいるのである。」<sup>(8)</sup>

サン＝テグジュペリの生命進化のヴィジョンは、基本的にベルグソンやティヤール・ド・シャルダンのヴィジョンに一致する。生命は心的なものであり、生命進化は意識が物質の抵抗と闘いながら次第により高次の自在性、自律性を獲得してゆく過程である。そして、意識が高度の自由を獲得するにいたった人間の行う精神活動は、生命の全歴史をここまで進展させてきた推進力を受け継ぎ、さらに発展させてゆくべきものである。「人間の大地」の最終章で、サン＝テグジュペリはこのヴィジョンを次のように表している。

「樹木の成長のゆるやかな歩みにも似て、このように世代から世代へと伝え

られてゆくものは、生命であると同時に意識でもあったのだ。なんという神秘的な上昇だろう！ 灼熱の溶岩から、星の練り粉から、奇跡的に芽ばえた生命ある細胞から、わたしたち人間は生まれたのだが、徐々にわたしたちは、カンタータを書き、銀河を計測するまでにおのれを高めてきたのである。」(OC I, p.282)

「星雲の凝縮、遊星の凝固、最初のアメーバの形成、アメーバを人間にまで進ませた生命の巨大な営為」(OC II, p.96)、その営為のうちにサン＝テグジュペリはひとつの一貫した上昇過程を読みとる。それは意識の上昇、意識の拡張である。生命は意識のより大きな自在性を求めて徐々に進化し、ついに人間へといたる。高度な意識性を獲得した人間は、今やその意識を宇宙のはるかな空間にまで及ぼしている。この人間の精神の営為は、アメーバから人間へといたらせた「生命の巨大な営為」と本質的に同質のものであり、後者の営為を受け継ぐものである。なぜなら、「生命は意識に向かって歩む」(OC I, p.362)ものだからである。この歩みはまだ終わってはいない。生命は今なお生成途上にある。わたしたち人間は、獲得した知識を言語や教育によって世代から世代へと伝え、次第に知識を蓄積し、かくして意識を高め、意識を拡張させてきた。わたしたちは今なおこの精神の営為をやめてはいない。そればかりか、それを欲求してもいる。この欲求、それをサン＝テグジュペリは「飢え」ということばで表している。

「かのスペインの兵士たちを、砲撃のさなか、植物学の授業へと駆り立て、メルモーズを南大西洋へと駆り立て、またある男を詩へと駆り立てる飢え、その飢えをわたしたちが味わうときに感じるのは、まだこの生成過程が終わっていないということ、わたしたちは、わたしたち自身と宇宙とを意識化してゆかねばならないということだ。」(OC I, p.282)

人間には、自分たち自身について、宇宙について、さらに意識化してゆかねばならないという事業が課せられている。というよりもむしろ、人間はそうした意識化を半ば本能的に欲している。「飢え」ということばは、人間のそのような本能的な欲求や渴望を意味するものであるだろう。この人間のなかの「飢え」は、これまで生命進化を推進してきた原動力と同じものであるとも言えるわけ

で、人間はこの地球上ではじめて自律的な意識を、精神を獲得した生物であるが、その意識や精神をさらに増大させることによって、生命進化の歩みをさらに前へと進ませなければならない。

それが、「宇宙的尺度で人間を判断」し、「人間の歴史をさかのぼって読む」ことによって、サン＝テグジュペリの発見した人間の、また人類の使命であり、意味であり、方向性である。人間は生命進化の最先端に位置し、「宇宙の漸進的精神化の原理」<sup>(9)</sup>を代表する。人間は、人間や宇宙についてさらに認識を深めてゆかねばならないし、自己の完成を目指し、世界の完成を目指して歩んでゆかねばならない。人間の生命の根底には、ベルグソンの言う「生命の根源的なはずみ」が息づいているはずであるし、人類は「自らの誕生、自らの歴史、自らの自然的環境、自らの外的な力と自らの魂の秘密を徐々に自覚していき」<sup>(10)</sup>ながら、生命進化の新たな段階、「精神の生成」<sup>(11)</sup>の過程を推し進めているのである。

こうした人間や人類の意味、方向性、その宇宙における位置づけこそ、サン＝テグジュペリにとって普遍的なものであり、サン＝テグジュペリはこの普遍的な視点から、現実のあらゆる事象をとらえなおそうと努めるだろう。

## 9. 普遍的言語

人間の行動には多様な意味がある。表層的な意味、深層の意味、個別的な意味、普遍的な意味、また、具体的な意味、象徴的な意味等である。同じひとつの行動が、視点を変えることによって違った意味に解釈されることがある。また、表層的な次元では対立しあうようにみえるふたつの行動が、深層においては同じ意味を担っていることもある。サン＝テグジュペリは、人間や人間の事象を、その深層において、またその普遍的な面からとらえなおし、そうして表層的な対立や分裂を乗り越えようとする。『人間の大地』の最終章の多くは、当時の世界の政治社会状況についての分析にあてられている。それらを問題にする前に、サン＝テグジュペリの普遍的視点なるものが明快に表れ出ているひとつの例をとりあげよう。

それは「砂漠のただなかで」の章で語られている、砂漠に遭難した語り手とプレヴォーを救ったリビアのベドウィン人の話である。このベドウィン人の個人としての相貌は、語り手の記憶から永遠に消え失せてしまうにしても、「人間」としての相貌はいつまでも消え失せることはないと言語手は言う。

「わたしたちを救ってくれたきみ、リビアのベドウィン人よ、きみの姿は、それでもわたしの記憶から永遠に消え去るだろう。きみの顔はけっして思い出すことはないだろう。きみは『人間』だ。そしてきみは、同時にあらゆる人間の顔をしてわたしに現われる。きみはわたしたちの顔をまじまじとは見なかったのに、もうわたしたちを認めてくれた。きみは最愛の兄弟だ。そして、このわたしのほうも、あらゆる人間のなかにきみを認めるだろう。」(OC I, p.268)

語り手とプレヴォーを救ったこのベドウィン人は、語り手にとっては、個別の人間である以前に普遍的な意味での「人間」であった。いわば人間の代表である。砂漠に遭難した人間を救うという行為は、このベドウィン人ならずとも、人間であればだれしも行うことである。この行為は人間の普遍的な行為に属するだろう。そして、救われた語り手たちもまた人間の代表である。「きみはわたしたちの顔をまじまじとは見なかったのに、もうわたしたちを認めてくれた」。ベドウィン人にとって、「わたしたち」がだれであるかは問題ではなかった。「わたしたち」が人間であるというだけで十分であった。ベドウィン人は、それがだれであれ、相手が人間であったから救ったのである。要するに、ひとりのベドウィン人が語り手とプレヴォーを救ったという個別的な事実の背後に、「人間」が「人間」を救ったという普遍的な事実があるわけである。

語り手はこのベドウィン人を通して、あらゆる人間に感謝し、人間の人間への友愛の心に感謝し、自身もまたあらゆる人間に友愛を捧げる。ベドウィン人を通して再び自分の友、自分の敵たちのなかに、つまり人間たちのなかに戻ってくることができた語り手は、「わたしにはもう、この世界にただひとりの敵もない」と言い切るほどに、人間にたいする友愛の念に満たされる。

「きみは、高貴さと歓待とに溢れ、飲むものを与える力を持った大いなる主としてわたしに現われる。わたしのすべての友、わたしのすべての敵がきみを通じてわたしのほうに歩み寄ってくる。だから、わたしにはもう、この世界に

ただひとりの敵もない。」(OC I, p.268)

ここに語られているような人間相互の友愛はひとつの理想ではある。しかし、現実とはかけ離れている。主義、信条、宗教の違い、その他もろもろの立場の違いが、世界に対立と分裂をもたらしている。人間は愛によって相互に結びつくよりも、憎しみによってたがいに敵対している。こうした状況を乗り越えるにはどうすればよいのだろう。そのために必要なのは、自分たちの外側にある共通の目的を自覚することであるとサン＝テグジュペリは考える。共通の目的に向かってともに歩むときにのみ、人々は愛することができるからである。

「わたしたちの外側にある共通の目的によって同胞たちに結ばれるとき、そのときはじめて、わたしたちは呼吸することができる。また経験はわたしたちに教えてくれる。愛するとは、けっしてたがいに見つめ合うことではなく、いっしょにおなじ方向を見ることだ、と。」(OC I, p.276)

とはいえ、人間たちを結びつける共通の目的は、はたして存在するのだろうか。サン＝テグジュペリは存在すると答えるだろう。たしかに現実を眺めれば、万人に共通する目的はないようにもみえる。しかしながら、異なる目的を目指しながらも、人間はすべておなじものを求めていると、サン＝テグジュペリは主張する。

「人はそれぞれ、かの充実感を約束してくれる宗教にたいしておのれを高揚させる。わたしたちはすべて、矛盾した言葉のもとに、おなじ心の飛躍を表明しているのだ。わたしたちは、おのれの推論の結果である方法にかんしては分裂していても、目的にかんして分裂しているわけではない。目的はすべておなじなのだ。」(OC I, p.277)

ここで注意しなければならないのは、一般的な意味でのいわゆる「目的」は、ここでは「方法」と呼びかえられていることである。同様に、ここでの「目的」は、むしろ「目的の目的」とでも言い換えるべきものであるだろう。つまり、「方法」(一般的な意味では目的)は多様で分裂してはいても、それらが目指す「目的」(目的の目的)はすべておなじであるというのである。要するに、人間はすべて生の充実を求めている、それがここで言う「目的」であり、生の充実

を約束してくれる主義や信条や宗教は多様で、分裂し、相互に矛盾してはいても、それに身を捧げる人間は、すべて「おなじ心の飛躍を表明している」というのである。

ところで、この引用文のなかの「かの充実感を約束してくれる宗教」とは、3章の「召命」のところでとりあげた「真実」、つまり、人間に充実の感情を与え、人間の内なる「未知の人間」、すなわち「真の自分」を解放せしめる条件にほかならないだろう。そして、「未知の人間」、「真の自分」についてもおなじ章で定義しておいたが、もう一度ここで繰り返すなら、それは「各人がそうなることのできる人間」、「またそうならねばならない人間」であり、「自分の本来の偉大さ」を解放しえた人間を意味するものである。サン＝テグジュペリはそうした真の自分を解放しえた者のみが、「人間」の名に値すると考える。それは「人間にとっての真実とは、人間を人間たらしめるものだ」(OCI, p.278)ということばに明らかであるだろう。サン＝テグジュペリにとって、人間は生まれながらにして人間であるのではない。人間は自らの真実と出会い、その真実に生きることによって「人間」に成る。人間は在る存在ではなく、成る存在であり、人間は「人間」に成らねばならないというのは、「人間の大地」の主要なモラルのひとつである<sup>(12)</sup>。

ところで、人間が「人間」に成るためには、自分にとっての真実と出会うこと、「生育に適した土壌」に自分を植えこみ、「厳しい要請を課する宗教」を得ることが必要であるということは、これもまた3章ですでに述べた。ただ、ここではそのもうひとつの側面を明らかにしておきたい。それは個人を超えたものへの奉仕が必要であるということである。人間が真の自分を解放し、「人間」に成るためには、個人を超えたものへの奉仕が必要であるというのは、一見矛盾しているようにもみえる。しかしながら、逆説的であるとはいえ、真の自分、つまり人間の本来的な偉大さが引き出されうるのは、人間が自己を超えたものに身を捧げることによってなのである。『手帖』のなかでサン＝テグジュペリは言っている。

「偉大さは、まず—そしてつねに—おのれの外に置かれた目的から生まれる(アエロポスタル社)。人間はおのれ自身のなかに自らを閉じこめるやいなや貧

しくなる。人間が《おのれに》仕えるやいなや、これもまた同然である。」(OC I, p.506)

「人はおのれを超えるやいなや、到達するのは普遍であり一人間の偉大さである。」(OC I, p.514)

それゆえ、サン＝テグジュペリの言う「真実」とは、「おのれの外に置かれた目的」、個々の人間を超えた集団的なもの、人類的なもの、神的なもの等に関わる価値基準と言えるだろう。先の「方法」と「目的」についての引用文のなかで、「かの充実感を約束してくれる宗教」が「おのれの推論の結果である方法」に言い換えられていたように、今度は、この「方法」を「真実」ということばに変えて、サン＝テグジュペリは同様の趣旨を次のように述べている。

「人間とその要請を理解するためには、人間をそれが持つ本質的なものにおいて認識するためには、あなたがたの真実の自明性をたがいに対立させてはならない。もちろん、あなたがたは正しい。あなたがたはみんな正しい。論理はなんでも証明する。(・・・)

その本質的なものを明るみに出そうとするにあたっては、しばらく分裂を忘れないなければならない。分裂がひとたび容認されてしまうと、揺るがせようのない真理の聖典と、それから生まれる狂信とを招きよせることになる。人間を左翼と右翼の人間、せむしとせむしでない人間、ファシストとデモクラットに分けてならべることはできるし、そのような選別は攻撃しようのないものだ。」(OC I, p.278)

推論から生まれたもろもろの「真実」を論理的言語で論じても、対立と分裂は解消されるどころか、いっそうひどくなるばかりである。「論理はなんでも証明する」。論理をもってすれば、あらゆる「真実」はその正しさを証明できるのである。サン＝テグジュペリが望むのは、「人間とその要請」を理解することであり、「人間をそれが持つ本質的なものにおいて認識する」ことである。その理解と認識を踏まえてはじめて、対立と分裂を乗り越えることが可能となるからである。サン＝テグジュペリは続けてこう述べている。

「だが、ご存じのように、真実とは世界を単一化するものであって、混沌を生み出すものではない。真実、それは普遍的なものを明るみに出す言語である。

ニュートンはけっして、クイズを解くように、ながいあいだ隠されていた法則を《発見した》のではない。ニュートンは創造的な営為をおこなったのだ。彼は、牧場にりんごが落ちるのも、太陽がのぼるのも同時に説明しうるような人間の言語を築きあげたのだ。真実、それは論証されるものではなく、単一化するものにほかならない。」(OC I, p.278)

先に「目的」ということばに関して注意したように、ここでもサン＝テグジュペリの語法はあいまいである。先の「目的」を「目的の目的」と解釈したように、ここでの「真実」もまた「真実の真実」と解釈するほうがサン＝テグジュペリの真意により近いだろう。要するに、対立し分裂しているもろもろの真実を総合し、統一化する一階梯上の真実がここでの「真実」であるだろう。ニュートンが、一見相反する異なる現象をともに説明しうる言語を築きあげたように、サン＝テグジュペリもまた、もろもろの真実を総合し統一する普遍的な言語を築きあげようとする。その出発点となるのが、万人に共通する人間の持つ「要請」である。

「一方で人間は、わたしたちの周囲いたるところで、おなじ要請を表明している」(OC I, p.279)

この要請は、種々の表現のなかで説明づけられている。

「わたしたちは解放されることをのぞんでいる。つるはしを打ちこむ者は、そのつるはしの一撃に意味を見出すことをのぞんでいる。(・・・)

ヨーロッパには、意味を持たず、しかも生まれ出ようとねがっている二億の人間たちがいる。(・・・) 彼らはめざめさせられることをのぞんでいる。(・・・)

すべての人間が、程度の差こそあれ、漠然とでも生まれ出たいという要請を感じている。」(OC I, p.279)

ところで、人間のこの要請は、3章で私たちが「召命への欲求」と名づけたものとおなじものにほかならないだろう。さらには、前章の最後にとりあげた「飢え」もまた、おなじ要請、おなじ欲求から来るものであるだろう。こうした万人が共有する要請(欲求)を充足させる共通の目的があれば、人間はその目的のもとに結びつくことができるであろうし、対立と分裂を乗り越えることが

可能になるだろう。だが、この要請（欲求）を充足させる誤った解決法もあるとサン＝テグジュペリは言う。

「だが、ひとを誤らせる解決法というものも存在するのだ。もちろん、制服をきせることによって人間を鼓舞することはできる。そのとき彼らは、戦争の讃歌をうたい、仲間どうしでパンを頒ち合うだろう。彼らはおのれが探し求めているもの、普遍的なものの味わいを見出すだろう。だが、おのれにさし出されるパンによって死ぬことになるのだ。」（OC I, p.279）

ここに語られている「彼ら」は、たしかに共通の目的のもとに、同胞たちと結びつくことができるし、彼らの要請、「おのれが探し求めているもの」、つまり「普遍的なものの味わい」を見出すことができる。だが、彼らの結びつきはいわば党派内でのことにすぎず、さらには、彼らがその目的のために死んだところで、その死に普遍的な意味を与えることはできない。彼らが見出す「普遍的なものの味わい」は、ほんとうの意味でのそれではないだろう。

先に、人間が「人間」に成るためには、個人を超えたものへの奉仕が必要であるということを述べたが、個人を超えたものとは、なんであっていいというようなものではない。それは、稲垣直樹が言うように、「人類的な普遍性に道を開くものでなければならない」<sup>43</sup>だろうし、「人間の共同体」（OC I, p.279）に寄与するものでなければならないだろう。「彼ら」が仕える目的は、その条件に合致しない。

すべての人間の持つ要請（欲求）を充足させる共通の目的、それはすべての人間を結びつけることのできるものを目的とすることである。人間の行為にはさまざまな行為があるし、それらの行為にはまたさまざまな意味がある。しかし、あらゆる行為の最も普遍的な意味、最も根源的な意味をたどれば、すべてがあるひとつの目的を指向している。それをわたしたち人間の共通の目的として自覚することができれば、対立と分裂を解消することができるだろうし、わたしたち人間は連帯し、愛によって結びつくことができるだろうと、サン＝テグジュペリは考える。

「わたしたちを解放するにあたっては、わたしたちを相互に結びつけている目的を自覚するように援け合えばよいのだから、その目的がわたしたちすべて

をひとつに結び合わせるところに、その目的自体を探し求めればそれでいい。診察をおこなう外科医は、問診する患者の訴えには耳を貸さない。患者を通じて彼が治療しようと努めるのは人間である。外科医は普遍的な言語を語る。物理学者が、原子と星雲とを同時に把握するほとんど神のごとき方程式を考えている場合も同様である。そうやって、一介の羊飼いにまでいたるのだ。なぜなら、星空のしたでつつましく数頭の羊を見守るその男にしても、もしその役割を自覚するなら、おのれが召使い以上のものであることを発見するからだ。彼は歩哨なのだ。そして、ひとりひとりの歩哨は帝国全体の責任を担っているのだ。」(OC I, p.280)

ここでサン＝テグジュペリの頭にあるのは、生命進化の思想である。人間たちのすべてを結びつけることのできる目的とは、進化する生命への奉仕である。そして、事実、「外科医」、「物理学者」、それに「一介の羊飼いにまでいたるあらゆる人間が、その最も普遍的な次元においては、進化する生命に奉仕しているのである。『帝国』とは、生命進化の歩みのなかで、人類が全体として推し進めている事業、意識の増大、世界の建設、文明の構築等を象徴的に指し示す語であり、あらゆる人間はさまざまな側面からその「帝国」に奉仕することによって、同時に進化する生命にも奉仕しているのである。

あらゆる人間が「帝国全体の責任を担っている」、あるいは担わなければならない。人間はこの責任を引き受けることによって「人間」に成るのである。5章でとりあげた「人間であるということは、まさに責任を持つことだ」ということばの真意が、ここにきて鮮明なものとなるだろう。

「人間であるということは、まさに責任を持つことだ。おのれにかかわりないと思われていたある悲惨さをまえにして、恥を知るということだ。仲間がもたらした勝利を誇らしく思うことだ。おのれの石を据えながら、世界の建設に奉仕していると感じることだ。」(OC I, p.197)

ギヨメの「かしこ、生きている者たちのあいだで築きあげられつつある新しいもの」にたいする責任とは、まさにこの「帝国全体」への責任であった。死を前にしてなおも「土を掘って、掘りまくりたい」と願っていた庭師もまた同じ責任を担っていた。語り手の子ども時代の思い出のなかにいつまでも生きて

いる「年老いた家政婦」もまた同じである。なぜなら、その家政婦もまた「なにかしら自分より大いなるもの、神なり船なりへの奉仕」(OC I, p.208)に身を捧げていたからである。

そのように、あらゆる人間は、「帝国」にたいしおのれ固有の役割を果たしつつ、それに奉仕し、「帝国全体」の責任を担っている。あるいはそうあるべきものである。この帝国にたいする役割には、いとも慎ましい役割もある。三人の農夫の母親であったある農婦の死のエピソードが、それを語っている。その農婦は次の世代を受け継ぐ息子たちを生み、息子たちにことばを教え、彼らを教育し、育成した。それは母親としてのごくあたりまえの行為である。しかし同時に、この行為には、帝国へのひとつの奉仕、人類的営為に果たすひとつの役割の意味がある。

「あの母親は、けっして生命だけを伝えたのではなかった。彼女は息子たちに、ひとつの言語を教えたのだ。彼女は息子たちに、諸世紀を通じてゆっくりと蓄積されてきた荷を、彼女自身も寄託物として受け取った精神的世襲財産を、ニュートンやシェークスピアを洞窟の原始人と分かついっさいの差異をなすものとしての、伝統と概念と神話とのつつましい分け前を伝えたのだ。」(OC I, p.282)

こうして生命と意識は世代から世代へと伝えられ、人類の「精神的世襲財産」は世代を経るにつれ豊かになっていく。この母親は自らの役割を終え、その役割を次世代の息子たちに譲り渡したのである。母親の死はひとつの生の終わりを告げるものではあれ、個人を超えた大いなる生命においては、ただ「ひとつの世代から次の世代への移行を告げ知らせ」(OC I, p.282)るにすぎない。このような死こそ、サン＝テグジュペリの言う「ものごとの秩序のなかにある」(OC I, p.281)死であり、安らかな死である。「帝国」への自らの役割を自覚することができるなら、ひとは、この農婦のように安らかな死を迎えることができるだろう。

「たとえ目立たぬものであらうと、自分の役割を自覚するとき、わたしたちははじめて幸福になるはずだ。そのときはじめて、平安のうちに生き、平安のうちに死ぬことができるはずだ。なぜなら、生に意味を与えるものは、死にも

意味を与えるからだ。」(OC I, p.281)

そして、さらに重要なことは、あらゆる人間が「帝国」にたいする自分の役割を自覚するなら、ひとは「帝国」を通してすべての人間と結びつき、「帝国」にたいする責任を通して、すべての人間にたいする責任を自覚するだろう。あらゆる人間が自分の役割を自覚するとき、そのときにはじめて、サン＝テグジュペリの次のことばが現実味を帯びてくるだろう。

「なにゆえ憎み合うことがあるう？ おなじ遊星によって運ばれるわたしたちは、連帯責任を担っているし、おなじ船の乗組員だ。」(OC I, p.280)

## 10. 結語

サン＝テグジュペリの人間や人間の生についてのとらえ方は、以上の考察から明らかなように、サン＝テグジュペリ自身の到達した生命進化のヴィジョンのなかに改めて位置づけられ、そこにおいて完結される。人間は他の生物と同様、地球上に誕生して以来進化し続けてきた生命を自らに担っている。しかし、人間が他の生物と異なるのは、この生命進化の先端に位置しているということである。人間が誕生する以前の生命進化は、ふたつの面において推進されてきた。ひとつは肉体の形態変化であり、もうひとつはその形態変化の内的側面としての意識の自在性の増大である。そして高度な意識性を獲得するにいたった人間の誕生以後は、生命進化はもっぱら意識の増大、精神化の方向に向かうことになった。サン＝テグジュペリにとって、それこそが人間のとるべき方向性である。それどころか、人間はいわば生物学的に、本能的にそれを欲求しているというのが、サン＝テグジュペリの考えである。「飢え」や「みずから意識しないある本質的な要請」といったことばがそれを言い表しているだろう。

個々の人間の意識の増大、精神化への歩みは、全体として人類という集団的意識の拡大、上昇へとつながってゆく。そして、この拡大された新たな集団的意識が、個人的意識を規定し、そのいっそうの向上を促す。ティヤール・ド・シャルダンが『人間の未来』のなかで言っているように、個人としての人間に

支えられながら、それら無数の個人をおおい、規定する「一種の人類的人格」<sup>(4)</sup>が、この地球上に形成されつつある。サン＝テグジュペリによれば、この「人類的人格」の向上発展に、人間は寄与しなければならない。人間が、生成する存在、あるいは生成すべき存在であるように、人類もまた、生成する存在であり、生成すべき存在である。この生成、それは生命の誕生以来、生命自体が行ってきた生成を受け継ぎ、さらに前へと推し進めるべきものである。

この生成はどこに行き着くのか、それについては、サン＝テグジュペリ自身、明確に語ってはいない。ただ、この生成過程が「なにかある真実」(OC I, p.282)に向かったの歩みであるとしか言っていない。しかし、サン＝テグジュペリによれば、この方向性は「良き方向」であり、宇宙の「良き意志」を証拠立てるものであって、それこそが人間と人間の生に意味を与えることのできる唯一のものなのである。

「わたしたちが、粘土から芽生えた起源以来、とってきた良き方向に歩いていくとき、そのときにのみわたしたちは幸福になるだろう。またそのとき、わたしたちは平安に生きることができるだろう。なぜなら、生に意味を与えるものは、死にも意味を与えるからだ。」(OC I, p.362)

「そのようにして宇宙は、わたしたちを通して、その良き意志を証拠立てていた。星雲の凝縮、遊星の凝固、最初のアメーバの形成、アメーバを人間にまで進ませた生命の巨大な営為、すべては幸運にも収斂し、わたしたちを通して、このような質の歓びへと到達したのだ。」(OC II, p.96)

(本学教授)

## 注

- (1) R.-M. Albérès, *Saint-Exupéry*, Edition entièrement refondue, Albin Michel, 1961, p.9
- (2) サン＝テグジュペリ 著作集別巻、『証言と批評』、山崎庸一郎編・訳、みすず書房、1990年、pp.208-209
- (3) これについて、アルベレスは次のように言っている。「要するに、サン＝テグジュペリの倫理思想および宇宙観は、まさしくベルグソンやテイヤー

ル・ド・シャルダンが提示する高揚的な大いなるイメージに近い。そこにはたしかに暗合がある。それは《文学的影響力》によっては説明できないあの多くの暗合のひとつである。これを説明できるものとしては、ただ、同じ半世紀のあいだに、ひじょうに異なる何人かの人間が、結果としては同一の図式を用いて、世界を説明し称揚することが起りうるという事実だけである。」(R.-M. Albérès, op.cit., p.9)

(4) R.-M. Albérès, op.cit., p.11

(5) サン＝テグジュペリ著作集別巻、『証言と批評』、山崎庸一郎編・訳、みすず書房、1990年、p.212

(6) Henri Bergson, *Œuvres*, Presses universitaires de France, 1991, p.581

(7) Ibid., p.716

(8) *Œuvres de Pierre Teilhard de Chardin*, t.1, *Le Phénomène humain*, Seuil, 1955, p.159

(9) サン＝テグジュペリ著作集別巻、『証言と批評』、山崎庸一郎編・訳、みすず書房、1990年、p.214

(10) *Œuvres de Pierre Teilhard de Chardin*, t.5, *L'Avenir de l'homme*, Seuil, 1959, p.48

(11) テイヤール・ド・シャルダンは、地球および地球における生命の発展段階を、順次、地球の生成、生物の生成（心的生成）、精神の生成と呼んでいる。そして、思考力をそなえた人間の出現以来、生命進化は生物の生成（心的生成）から精神の生成の段階に移ったと言っている。

「地球化学、地球構造地質学、地球生物学の脈動のもとに、ただひとつの同じ基本的過程がつねに認められる。その過程はまず原初の細胞のうちに物質化し、その後、神経系の構築のなかに継続されていった。つまり、地球の生成は生物の生成に移行したということであり、この生物の生成とは、結局、心的生成にほかならない。

思考力の臨界とともに、また思考力の臨界のうちに、姿を現すのは系列の次の項である。心的生成はわたしたちを人間にまで導いた。今や心的生成は消え去り、より高度な機能がそれを引き継ぎ、吸収する。その機能と

は、まず精神を生み出し、その後、精神のあらゆる発展をうながす機能、すなわち精神の生成である。」(Œuvres de Pierre Teilhard de Chardin, t.1, *Le Phénomène humain*, Seuil, 1955, p.200)

(12) Cf. Curtis Cate, *Antoine de Saint-Exupéry, Laboureur du ciel*, Traduit de l'anglais par Pierre Rocheron et Marcel Schneider, Grasset, 1994, pp.269-271

(13) 稲垣直樹、『サン＝テグジュペリ』、清水書院、1992年、p.118

(14) Œuvres de Pierre Teilhard de Chardin, t.5, *L'Avenir de l'homme*, Seuil, 1959, p.49